

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：53301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K02437

研究課題名（和文）近世中期漢詩総集『大東詩集』についての総合的研究

研究課題名（英文）A comprehensive study on "Daitou-sisyuu", Anthology of Japanese Kanshi in Edo period.

研究代表者

高島 要 (TAKASHIMA, KANAME)

石川工業高等専門学校・その他部局等・客員研究員

研究者番号：80124022

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：近世漢詩総集『大東詩集』について現存する伝本を系統別に整理した。収録漢詩に、作品番号を付し、全編について電子化テキストを作成した。これによって、収録詩人数、収録作品数を確定した。『大東詩集』の詩作品及び「大東詩集詩人姓名」をもとに、『大東詩集』に採録された各詩人の別称、出身地、主な著作等を整理した。また、収録詩人名索引を作成した。漢詩の典拠となった詩集を通して、採録の経緯を検討した。『大東詩集』の編集方法について、他の漢詩集との関係を検討して考察した。採録された詩人を特定し編者舟木藻雅堂の役割等を通して、『大東詩集』について文学史的に検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本文学における漢文学・漢詩文学の果たした役割は大きい。特に、江戸時代は、漢詩漢文学が大きく深化し、拡がりをみせた時期であった。中に漢詩文芸の成果は、多くの詩人たちの佳作・名作を収録した漢詩総集に顕著である。本研究者はこれまで、近世漢詩総集『日本詩選』『熙朝詩薈』また明治初期成立の『東瀛詩選』について、作品本文のデータベース化、収録詩人の様相等の研究をすすめてきた。ここに江戸中期の『大東詩集』の作品本文の電子化を行い、詩人の様相等を加えて、近世漢詩文芸研究の基礎を成したことが、本研究の第一の意義である。

研究成果の概要（英文）：The collection number was given to the Kanshi of "Daitousisyuu", Anthology of Japanese Kanshi in Edo period, and the text database was created. In this way, collecting poetry number and the number of the collecting poets was identified. Based on "Daitousisyuu-soumoku", original poetry text works of the Kanshi recorded and selected were collected, and the circumstances of selection and recording were examined on it. About an editing method on "Daitousisyuu", the direct relations with the other collection of Japanese Kanshi was also considered. The poet recorded and selected was specified and it considered like history of literature of "Daitousisyuu" by examination of a relation with the editor, etc.

研究分野：人文学

キーワード：日本文学 近世文学 近世漢詩 大東詩集 舟木藻雅堂 漢詩総集 近世漢詩人 日本漢詩

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の動向

近世日本漢詩研究は、近時急速に且つ多角的な視点から進んでいる。漢詩集の基礎的研究について有力な漢詩人を中心に、「詞華集日本漢詩」「新日本古典文学大系」「江戸漢詩選」『日本漢詩集』(新編日本古典文学全集)等に注釈的研究・解題的研究の成果が結実している。さらに文学史的研究には、特に、近世中期に文学活動として漢詩文芸が定着していくことを推進した荻生徂徠門下(古文辞派)の果たした役割を指摘した成果がある。本研究は、そうした研究動向の線上から、『大東詩集』を中心に漢詩集また漢詩人の新たな発掘、ひいては近世中期の漢詩壇の状況及び漢詩総集の編纂意義等について総合的研究を行うものである。

(2) 本研究の位置づけ

本研究は、漢詩集・漢詩作品自体を直接に研究対象とするものである。漢詩作品の本文整理、収録する漢詩総集の構成、また漢学者を一詩人の視点からみる作家論的研究など、文学の面から近世漢文学史、漢詩史研究の中に位置づけようとするものである。

『大東詩集』は収録作品(697首)収録詩人(266人)を確定する。近世漢詩作品データベース及び詩人データベース作成研究の重要な部分に位置づけられる。

総集・別集を併せて、近世漢詩集のあり方の研究の中に位置づけられる。

(3) 研究代表者の従来の研究との関連や着想の経緯

研究代表者は、清国の大儒である俞曲園が編集した日本漢詩総集『東瀛詩選』について総合的な研究を実施した(その成果は『東瀛詩選本文と総索引』(研究成果公開促進費 185050)平成 19 年 2 月刊行)。研究代表者における近世漢詩総集研究の端緒は、この『東瀛詩選』研究にあった。

研究代表者は、前項『東瀛詩選』の研究を端緒に、同詩集の編纂の参考とされた、近世中期の『日本詩選』の総合的研究を実施した(基盤(C)20520202)。『日本詩選』の漢詩史における位置づけを検討する中で、近世末期の漢詩総集『熙朝詩薈』への直接的な影響を見出すに至り、『熙朝詩薈』の近世漢詩史の中での意義を検討した(基盤(C)24520258)。

『熙朝詩薈』は近世期全体に亘る龐大な漢詩総集であり、有力な漢詩人の別集のほか『歷朝詩纂』『日本詩選』『ケン園録稿』等多数の総集を典拠として編纂されている。研究代表者は『熙朝詩薈』について、その典拠となった漢詩集を特定した。編者の友野霞舟は、昌平坂学問所(現内閣文庫)が所蔵する漢詩集を大概、直接に用いているが、『大東詩集』等、一部『熙朝詩薈』には採録されなかった総集は、改めてその意義を検討する必要があるとの認識に至った。

以上の研究を通して、近世漢詩史の評価においては、特に近世中期の漢詩壇の動向を検討する必要性を確認した。その中で、従来ほとんど顧みられていない『大東詩集』を、総合的に検討することが必要との認識に至った。

以上のように、研究代表者による、これまでの、『東瀛詩選』『日本詩選』そして『熙朝詩薈』の総合的研究が、近世中期漢詩総集『大東詩集』の研究に発展的に展開し、詩作品・詩人・漢詩史的観点等からの、『大東詩集』の総合的研究を着想する契機となった。

2. 研究の目的

(1) 研究目的

本研究は、江戸時代中期に舟木藻雅堂によって編纂された漢詩総集『大東詩集』について、漢詩本文の校定・所収詩人の伝記的研究・漢詩の典拠や編纂意識の解明及び漢詩本文のデータベース化を目的とする。発展して、『大東詩集』所収の詩人がどのような位置にあるものか等、近世漢詩文芸の拡がりを具体的に明らかにする。併せて、『大東詩集』の近世中期漢詩史における位置づけを考察する。もって『大東詩集』を対象とした近世漢詩研究における基礎的研究、及び『大東詩集』の近世漢詩史における意義についての文学史的研究の一助とすることを目的とする。

(2) 研究の対象

本研究が対象とする近世中期漢詩総集『大東詩集』は、編者は舟木藻雅堂、全7巻、天明2年(1782)初版。ほぼ宝暦から明和年間までの詩人266人、漢詩697首(研究代表者による。以上最大限の収録数をもつ寛政11年(1799)版による)。巻毎に詩形別に編集したもの。採録の時代も限られており、安永3年(1774)刊の『日本詩選』には及ばないが、規模では例えば『ケン園録稿』等の同時代の総集をはるかに超えるもので重要である。本研究では『大東詩集』を対象に以下の基礎的研究、文学史的研究を行った。

(3) 『大東詩集』の基礎的研究

『大東詩集』の諸伝本を確認し整理する。『大東詩集』は、天明2年初版(龍谷大学写字台文庫本2本、東北大狩野文庫本等)、寛政11年版(早大本等)、無刊記本(福岡大中野文庫本)等が確認されているが伝本間の詩人数、詩数の異なり等、伝本全体の状況を調査整理し、併せて増補や拡がりの過程を検討する。

『大東詩集』が典拠とした詩集を博搜し、それらとの校合によって詩本文を校定する。これにより定めた『大東詩集』の校定本文の電子化テキストを作成し、漢詩本文の整定研究及び詩句検索のためのデータベース的基礎を確立する。

『大東詩集』所収漢詩人266人について、巻頭の「詩人姓名」をもとに、雅号・学統・著作等の伝記的研究を行い、その成果を「『大東詩集』漢詩人データベース」とする。

(4) 『大東詩集』の文学史的研究

『大東詩集』所収の詩作品の採択される基準・視点を考察する。原公逸の序及び凡例によれば「諸名家本集已に梓行する者、其の遺りたるを拾いて之を収む」とあるように既刊の詩集の遺漏を補うほか、改めてその意義を明らかにする。当初舟木藻雅堂によって刊行されているが、伝本によって版元が異なっていく経過を確認する。

『大東詩集』の編纂経緯や影響を検討すること、及び『大東詩集』によって江戸期末期編纂の漢詩総集『熙朝詩薈』の欠を補うこと、それによって近世中期における漢詩総集作品を拾遺作業の一助を成し、ひいては『大東詩集』の漢詩史上の位置づけを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、2つの方法で展開され、また2つの段階的な計画のもとに実施する。

第一には、『大東詩集』の本文研究すなわち伝本の整理及び本文の整定である。これに基づいて、収録漢詩の本文の校定と電子化テキストの作成を成す、本文研究を中心とする基礎的研究で

ある。

第二には、『大東詩集』中の各収録詩人を評伝など詩人の面からの考察、近世中期における漢詩総集編纂の意義の考察等、総じて漢詩文学史的研究である。

4. 研究成果

(1) 伝本の整理と系統

『大東詩集』の11種の伝本を確認し整理した。『大東詩集』は、伝存する形態からは、天明二年版三巻本(一冊)、天明二年版七巻本(三冊)、寛政十一年版七巻本(四冊)の3種類に大別することができる。これを、巻毎の詩数・収録詩人数及び「詩人姓名」によって整理すると、更に天明二年七巻本は、詩数・収録詩人数によって甲本・乙本2種類がある。そして、形態的には異なる巻三までの一冊本は、七巻本乙本の一冊目に一致する。これをふまえて内容的に整理すると、系統()は、天明二年本甲本。甲本は三冊からなる七巻本と、その一冊目だけの本の2形態。()は天明二年乙本で、七巻本。()は寛政十一年本で四冊からなる。以上三系統である。

系統() 天明二年本甲本。この伝本には、(ア)巻三までの一冊だけが伝わるものと、(イ)巻七まで全体をもつ三冊の本がある。(ア)は東京都立中央図書館蔵加賀文庫本等がある。(イ)は、龍谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本の2本等がある。東北大学図書館蔵狩野文庫本も該当すると思われるが、該本は二冊目巻四・五を欠く。この天明二年本甲本が舟木藻雅堂の梓行した『大東詩集』の原初に位置づけられる本かと推定される。

系統() 天明二年本乙本。この伝本は、白杵図書館蔵稲葉家旧蔵本の1本だけである。収録内容としては、後述の系統()の寛政十一年本の中の「不破宣尹」を除いたものに重なる。一冊(巻一・二・三)二冊(巻四・巻五)三冊(巻五・巻六・七)の三冊である。天明二年刊で、これが舟木藻雅堂の梓行した『大東詩集』の到達点を伝えるものと考えられる。従ってこの1本は、重要である。

系統() 寛政十一年刊で版元が西村宗七である。一冊(巻一・二)二冊(巻三・四)三冊(巻五)四冊(巻六・七)の四冊である。系統()の天明二年本と冊構成が異なる。また、系統()にはない、不破宣尹(詩3首)を収録しているところが特徴である。系統()の後に、西村宗七によって刊行されたもので『大東詩集』の原初のものではなく、増補されたものである。不破宣尹(詩3首)が増補された事情は不明である。

他に、大阪府立中之島図書館蔵石崎家旧蔵本、尼崎市立地域研究史料館蔵堀江家蔵書本、内藤記念くすり博物館蔵大同薬室文庫本、宮城県立図書館蔵本、福岡大学図書館蔵中野文庫本を確認した。福岡大学図書館蔵中野文庫本は、七巻三冊本の写本で、系統()天明二年本甲本(イ)の版本の写本で、明治期の書写かと思われる写本である。

(2) データベース関係

『大東詩集』電子化テキストは、七巻本で『大東詩集』の基本となる系統()の白杵図書館蔵稲葉家旧蔵本(天明二年七巻本)と最大作品数を収録する系統()の早稲田大学図書館蔵本西村宗七版(寛政十一年版七巻本)を基に作成した。系統()からは、不破宣尹3首が収録された。

『大東詩集』詩人姓名」の翻刻を行い、それに基づいて「詩人名索引」を作成した。「『大東詩集』詩人姓名」は、系統()早稲田大学図書館蔵本西村宗七版(寛政十一年版七巻本)を底本とした。最も詩人数を多く採録するからである。

(3) 解題的研究

『大東詩集』は、七巻本を完成版とするが、版行され流布した状況は複雑で、一冊本、三冊本、また三巻本、七巻本と体裁も異なり、また舟木藻雅堂が編集したかと思われるが、その後、異なる版元からも出版されている。様々な形で流布したかと思われ、当時の詩壇の拡がりを示すものとなっている。

収録詩人数は266人、収録作品数は西村宗七版で697首であることを確認し、各詩人に詩人番号、また各作品に作品番号を付した。作品番号は、巻番号とその巻での出現順とを合わせて示した番号とした。

(3) 典拠と編集関係

『大東詩集』の所収詩人について、詩人別の作品を確定し暫定的に(作者を同定出来ていない者がいる)所収作品数を確認した。入集数が多数の詩人は、井上蘭台(井通熙)(18首)、西川瑚(18)、井上四明(井潜)(17)、内田叔明(14)、松崎惟時(12)、安達清河(安修)(10)、岳融(10)等であり、ほぼ半数の詩人は1首のみの入集である。編集事情については、最多数入集の西川瑚の周辺に関わる詩人群、熊阪邦・秀父子周辺の詩人群等、採択事情を想起させる詩人群を確認した。例えば西川瑚の別集である『蓬蒿詩集初編』は顕著に関わりがみられる詩集である。西川瑚、松崎惟時、安達清河等の多数入集詩人は、『蓬蒿詩集初編』との関わりを示すものである。併せて『大東詩集』は、各地の詩人結社等との関係において出版された可能性が強い、と推定した。

(4) 文学史的研究の課題

本研究の対象となった『大東詩集』は、当時の中央で版行されたものだが、採択された詩人達をみると、中央詩壇にも知られた者のほか、地方詩壇に場を持つ者が少なくない。殆どその事蹟を追うことが容易ではない者が相当数ある。この詩集に採択されたことで、幸いその名を遺すことになったという者もいるであろう。そういう意味で、同一の価値基準で評価することが適切ではないという見方もできる。総集ではあるが「詩華選」ではないと言える。『大東詩集』は、地域詩壇の評価、中央との関わり、あるいは詩結社の動向など多様な視点から改めて観察する必要がある。

そういう意味で、漢詩文学史研究から視座のほか、詩人達の活動した場である地域史研究の側からのアプローチも必要になろう。曲折した本研究を通して以上のようなことを今後の課題とすることを確認した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高島要	4. 巻 50号
2. 論文標題 『大東詩集』の「詩人姓名」翻刻－近世中期漢詩総集『大東詩集』についての基礎的研究（一）－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 石川工業高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------